野田キャンパス開設50周年企画

NODA DNA

2016年、野田キャンパスは開設から50年を迎えます。本企画では、50年間の歩みを見つめ直すことで野田キャンパスに受け継がれる「DNA」を探り、今後の50年を考えるヒントにしたいと考えます。

「野田キャンパスの思い出」

理工学部応用生物科学科　准教授
倉持 幸司さん

1997年東京理科大学薬学部製薬学科卒業。2002~2004年東京理科大学ゲノム創薬研究センター博士研究員。2005~2008年東京理科大学理工学部応用生物科学科助教。2016年より現職。

野田キャンパスはヘテロカリオン（同一の細胞内に複数の系統の細胞核を含む状態）だ。

私がこう断言するのは、ゲノム創薬研究センターでの研究活動が強く印象に残っているからである。ゲノム創薬研究センターでは理工学部、基礎工学部、薬学部の研究室が一つ屋根の下に集結し、お互いの専門知識や技術を持ち寄って、新薬の開発研究に取り組んでいた。

筆者が所属していた分子設計創薬部門は、薬学部の小林研究室、理工学部の菅原研究室と坂口研究室で構成されていた。お互いの専門能力を最大限に発揮し、数多くの研究成果を残すことができた。私はこの部門で研究できたことを誇りに感じており、このようなヘテロな研究環境を是非とも次世代に提供したいと考えている。

▲現在の研究室のメンバー（2016年）。中央が筆者。

▲ゲノム創薬研究センター分子設計創薬部門　第1回合同セミナーの様子（2002年）。

▲ゲノム創薬研究センター2階ロビーでの懇親会（2002年）。手前左が筆者。

2016/10/14　11:51